



みどりの風

平成28年10月3日発行
校報 第534号
〔みどりの風 第77号〕
練馬区立関町北小学校

伝統文化に学んで

校長 大野 泰弘

「四方より 馳せくる畦の 曼珠沙華」(中村 汀女)

畦道ではありませんが、学校の中庭には、いつのまにか曼珠沙華が咲いており、その姿に深まりゆく秋が感じられる季節になってまいりました。

さて、そんな秋の風景とは関係ありませんが、以下のようなセットが用いられる伝統文化があります。

橋掛かり 後座 目付柱 鏡板 地謡座 等々

これらのセットを舞台にしつらえてある伝統文化、それは「能」です。これら ~ は、能舞台の名称の一部です。

能舞台は、一辺が5.4mの正方形で、檜で作られている本舞台、本舞台に向かって左側の橋掛かり(登場人物の入退場の通路であり、演技をする場)、本舞台に接している地謡座(地謡方が座る場所)、後座(後見や囃子方が座る場所)からできています。橋掛かりの端には揚幕があり、その奥には鏡の間(シテが面をかけたたりする場で、ここから能が始まると言われている)があります。

舞台の中央後方にある「鏡板」には、どんな演目でも常に「老松」が描かれていて、本舞台には4本の柱が立っています。シテが能面をかけると視野が狭くなるので、その目印となるように、4本の中で「角柱」と呼ばれる柱は、別名「目付柱」とも言うそうです。

能舞台は、余分なものを削ぎ落として、極めて簡素な構造になっていますが、それだけに様々な工夫が施されています。例えば、橋掛かりには3本の松が設置されていて、本舞台に近い方から一の松、二の松、三の松と呼ばれますが、遠近法の手法を用いて、一の松から順に少しずつ低くなっています。また、能が当初は屋外で演じられていたことから、できるだけ自然の光に近くなるように、照明も明るさを多少控えてあるということです。

私が、このような能舞台の仕組みを調べるきっかけになったのは、先月、「第16回:松能会」という舞台を拝見する機会をいただいたからです。その舞台では、有名な「能」の演目である「百萬」と「景清」の2作品が演じられました。

「百萬」は、「西大寺付近で拾われた子が、嵯峨野に連れてこられたとき、一人の女性と出会う。その女性が念佛の音頭に合わせ舞った後、仏前に我が子との再会を願う。その子は、その女性の姿を見て母と気付く。その後、母と子は再会を果たし、故郷に帰っていく」というお話です。また、「景清」は、「源平合戦の後、平家の武将・景清は盲目となり、日向国に流されていた。鎌倉に住んでいた一人娘の人丸は、風の便りに景清の存命を知る。人丸は従者と共に父に会いに行くが、景清は他人のふりを押し通す。二人は、ほかの人の仲介で対面したものの、景清は源氏との合戦の様子を語った後、余命短い自分の跡を弔うよう頼み、父と娘は別れていく」というお話でした。「百萬」が「母と子」、「景清」が「父と子」という家族のつながりをテーマにした作品でしたが、いずれも人の情愛の深さを高い表現力で演じきる大作でした。

静かに始まった舞台では、シテの表現力や解釈の深さは言うに及ばず、それを支える地謡方や囃子方の謡や楽器の音色にも心を動かされました。特に、大鼓の重厚な音色、小鼓の柔らかな音色の響きは、西洋の楽器とはひと味もふた味も違った味わいを感じました。シテの動作の一つ一つを見たり、心の底からわき出てくるような言葉を聞いたりしていると、あらためて能舞台を前に身が引き締まるような感じがいたしました。能を集大成した「世阿弥」が「風姿花伝」を著したのは、シェークスピアが誕生する200年近く前とのことです。日本人として、我が国を代表する伝統文化を見聞することができてよかったと思いました。

ところで、この「松能会」の主宰を担っていらっしゃるのが、本校の6年生に毎年「能ワークショップ」のご指導をしてくださっている、観世流 能楽師 松木 千俊 先生(重要無形文化財保持者)です。松木先生は、「景清」を舞っていらっしゃいましたが、我が国の伝統文化のすばらしさを子どもたちに伝え残したいというお気持ちは、舞台後のご挨拶の中でもとても伝わってきました。今年度も、今月12日に地謡方、囃子方の皆様とともに、本校にお越しください。

「能」は、お正月番組だけにあらず、これからも機会を見付け、我が国の伝統文化を学び続けたいと思っています。そして、子どもたちも、世界無形遺産の「能」に限らず、狂言、文楽、歌舞伎などの古典にもふれ、日本人としての心を豊かに育ててほしいと思っています。それが、日本人としてのアイデンティティを確立することにもなるのでしょ。